

# 天狗のげんこつ岩

昔、村の若い衆が、なん十貫もある大石をもちあげたり、小石を、手の力で割ることで力くらべをしました。勝った者は自慢しましたが、それを聞いてよそから、見るからに強そうな若者がやってきて、何百貫もある大石を素手で割る力くらべをすることになりました。若い衆は困ったと思いましたが、男同士の約束だったので全身の力をこめて、石を叩き、手はくだけてしまいました。それを見て村人達はよそもの若者が逃げると思いましたが、若者は叫びとともに石をたたきました。石は割れませんでした、大きく凹んでいました。よくみるとそれは大きなげんこつの跡で、人間の手の大きさではありません。若者の姿は既になく、石の凹んだ所は天狗のげんこつの跡だと信じられるようになったそうです。(一貫は 3.75 kg)



（一貫は 3.75 kg）

# ちいせや

おかし、おかし、図体のでかえ漁師が、木更津へ、サルマタを買いにいったってよ。その男は、店屋の主人に、「おらあ、でかあえ、サルマタが欲しいだっべ」といい、主人は、比較的大きなサルマタをもってきてみせたってよ。漁師は、「もっとでかえのを」といい、主人は、特大のサルマタをもってきたってよ。それをみた漁師は、びっくりし、「こりゃあ、おったまげた、ちーせや、こりゃあ、ちーせや」といったってよ。「ちーせや」というのは、方言で「小さくはない、すばらしく大きい」ということだけど、主人は、それを知らなかったので、怒って、これ以上大きいものはないとって、奥へひっこんでしまったってよ。

# 勘解由どんの笛

小久保に勘解由どんと呼ぶ家がありました。おかし、勘解由どんの旦那が、成田山へおまいりに行った帰りに、宿屋にとまっていると、隣の部屋から、「勘解由どんは遅いなあ。」という声が聞こえてきました。「ははあ、このへんにも勘解由どんという家があるのか。」と思って聞き耳を立てていると、「あ、勘解由どんが来た。」という声がして、「勘解由どん、早く笛を吹いてください。」とみんなが言い始めました。すると、別の男の音が、「今日は、夕飯が熱いおじやだったから、舌をやけどしてしまって、笛が吹けない。」と言いました。「そんなこと言わないでお願いしますよ。勘解由どん。」という声が起こって、やがて、笛の音が聞こえ出し、にぎやかなお囃子が始まりました。旦那は、隣の部屋の勘解由どんのことが気になって、家に着くとおかみさんに、「昨日、何か変わったことはなかったか。」と聞きました。おかみさんは、「そういえば昨日の夕方、猫が、いやにそわそわして、熱いおじやをやったら、少し食べて、どこかへ行っちゃいました。」と言いました。旦那は「昨夜、笛を吹いたのは、うちの猫だったのか。」と思って、猫のほうを見ると、猫は、すっと立ち上がって歩き出して、どこかへ行ってしまったそうです。



**あとがき:** 富津にたくさんのお話があって、びっくり！  
方言のお話もあって、とても面白かったです。  
お話の全文をいつか読んでくれるとうれしいな！

なまえ

# ネットワーク Vol.18

発行日：2005年3月31日  
発行者：富津市子どもセンター  
体験活動・ボランティア活動支援センター  
富津市子どもセンター  
市役所生涯学習課内子どもセンター  
〒293-8506 富津市下飯野2443  
TEL.80-1342 FAX.80-1353  
E-mail.fukodomo@zd.wakwak.com

ネットワークは市役所、峰上出張所、公民館、市民会館、TEPCO 新エネルギーパーク、市内郵便局にあります。

## 富津市に伝わるお話

富津市に伝承されている昔話は、二百話以上あって、これ程たくさんの昔話が収集されているところは他にはないそうです。

なじみの深い地名がでてくるものを、地図にまとめてみました。もし、他に知っている富津のお話があったら、是非、子どもセンターに教えてくださいね。



## 田の草地蔵



吉野郷の中村と谷田沼村に、田植の後、悪い病気が流行し、田の草とりもきず、困っていると、笠も衣も破れた、おんぼろの坊さんがでて、村中をあるいて、「心配すっじゃねえ、この秋は豊年だぞ、田の草は、吾妻の宮の一族と、おれたち坊主どもがとるぞ、明日は終わらせる」と告げましたが村人たちは、だれ一人として信じませんでした。朝になると田の草が、一本も残らずぬきとられていました。ある日、吾妻の宮の地蔵堂にあつまり、豊作を祈ろうと地蔵さまを拜んだところ、なんと、地蔵さまの両手には、田の草が握られており、両足は田の泥だらけでありました。それから、このお地蔵様を田の草地蔵尊とよぶようになり、毎月24日の縁日には、ほうほうからお参りにくるようになりました。

## 関の姥さま

昔、関を流れる湊川のほとりに、背丈が鹿野山の2倍もある大きな姥がすんでいて、猿たちに木の実をあつめさせ、大きな石臼でゴロゴロと粉にして団子をつくっていたそう。姥は、中沼の水が好きでごくごく飲んでいましたが、沼に住む主は、姥が勝手に飲むといって怒り水争いがおきました。動物たちは相談して、モグラが沼の土手に穴をあけて水を流してしまい、争いはなくなり里は静かになりました。ある日姥が「話し相手がないな」と言っているのをトビが聞いて「常陸の筑波、下野の二荒山だっ、話し相手がいるのに、さみしいだろう」といったら、姥はばかにされたと思い怒って、石臼を袂にいれ、大股で住みなれた関を飛び出しましたが、あわてて飛び出したので、石臼を落としてしまいました。この石は、今も残っていて、姥石と呼ばれています。姥は右足を関におくと、左足を吉野にと足跡を残し、大男を探しにでかけたそうです。



# ふっつお話マップ

「ネットワーク」が調べたお話を、おもに地名がでていいるものを地図にしました。

1. 孫になった狸: 神門 小久保六人衆の網元の家へ働きにいった孫に狸が化けて、毎晩おばあさんをだまし、食べ物をせしめた話

2. 船幽霊 盆の夜に漁に出て船幽霊にあい、渡したあかとり(水をかき出す道具)で、船に水を入れられ、命からがら港に帰った話

3. ゲンソウの地蔵: 青木 大賞海岸であがった地蔵様といわれ、貝がついているとか。

4. 紺次郎狐: 富津 ワナにはまった狐が若者に、明後日が婚礼なので逃がしてと頼み、婚礼の晩に若者にお礼をした話

8. 宗祇さんのひげ: 千種新田 宗祇が追いはぎにあい、ほうきにするので長いひげをよこせといわれ、「わがのためのほうきばかりはゆるせかし浮世のちりをはきすてるまで」とい和歌を詠み、それを聞いた追いはぎは、宗祇にすべて返し、人里までおくってくれたとさ。

9. 天狗のげんこつ: 小久保 天狗が力くらべをした時に、凹んだという大石があります。

10. 勘解由どんの猫: 小久保 勘解由どんの飼猫が、笛を吹いたという話が伝わっています。

11. 熱病がはやった時: 小久保 夢で不動様におびわれて、富津岬から大賞の観音寺に行き、目が覚めたら病気が直っていた話

20. 貝殻の汁: 海良 天神山でた、貝のおつゆがうまかったので、村人にご馳走しようとし、作り方がわからず貝ガラのおつゆを作った話

21. 売津のひるは口曲がり: 売津 弘法大師がお経を唱えたら、ひるの口が曲がり、吸いつけなくなった話

22. 西ノ谷の話: 不入斗 住む人のいないお屋敷の座敷で、丑三つ時になると、帯戸がひとりだにスーと開き、取手には長い爪が見え、爪の根元には、五寸もありそうな長い毛がふさふさと…

29. ずるてんと狸: 環・関豊 人間に化けて薬師堂に遊びに来る狸が、堂守りのずるてんに、焼石でやけどをさせられた話

30. あらさわの水: 関豊 畑からでてきた石の棒が、お不動様が休む時に使った石とわかり、川田堂へ納め、雨乞いに使うようになったそうです。

31. 権三さんのおいはぎたいじ: 白狐 百首の権三さんが、追いはぎ退治に行ったけど、狐に化かされ肥だめの中にとさ。

32. 入定塚のせいじゅんさま: 相川 「私が仏となり疫病を鎮めましょう」と入定し、ミイラと化していったせいじゅん様の話

33. 釜神様: 金谷 海の中で光る、大きな丸い鉄の板を引き上げるため、村人が神に祈ったところ、鉄の板は四分六分に割れ引き上げることができたので、金谷神社に祀った。また、この鉄は、日本武尊が乗ってきた舟の先に吊り下げていた鏡だともいわれています。

34. 蛇むこ: 金谷 娘のもとに、通ってくる若者の素姓を知るため、木綿針に糸をおして着物に刺し、翌朝、糸をたぐっていくと…

5. 妙見様の氏子: 相野谷 村人をよく見てくれた偉い妙見様が、突然「人見に移りすむ」と言って、人見に移ってしまったので、その村の三軒は今でも、人見の妙見様の氏子になっている話

6. 親葉山: 三舟山 年寄りを捨てるおふれに背き、床下に親を隠し、見つかりとがめられたが、母親の知恵で許された話

7. 狛師浅右衛門: 一色 命乞いをする子持ちの大猿を撃って食べたら、病気になるって死んでしまった話

12. 田の草地蔵: 八田沼 お地蔵様がたんぼの草取りをして農民の暮らしを助けたという話

13. 茗荷の穂: 小久保 釣りをしていると足の親指に、幾重にも幾重にも蜘蛛の糸が巻きついてた。蜘蛛の糸を外して杭にかけたら、やがて杭は水中に引きこまれてしまい、それから、そこで釣りをする者はいなくなったとさ。

14. タヌキの書: 鶴岡 駕籠できた若様が古狸になり、しっぽで書いたという書が残されているそうです。

? 河童のてだすけ 田うないを手伝ってくれた河童を助けた多助の田は、他の田が潤っても、水に困らなかった。多助の作った河童のお墓は八幡川のほとりの「ゴンの宮」だそうですが、場所を知っていたらおしえてね!

15. うばすて: 鬼泊山 天秤棒で親をかついていったが、親が天秤棒を置いていくように言った話

16. 底なしの関: 桜井 大きな堰の所で耳を澄ますと、乙姫様の機織りの音が聞こえたりするという。

17. 姫ヶ淵伝説: 峰山 造海城の姫が、長崎の峰山の裾野にある、大きな淵へ身を投じたと言われています。

18. 田倉の河童: 田倉 河童が子どもの寿命を長くしてくれた話

19. 山神社のわん貸し: 田倉 お椀やお膳が入り用になって、山神社のくすの木の前で頼むと、根元に、頼んだ数だけのお椀やお膳が出てきたそうですが、ある日…

23. 六所神社の話: 不入斗 鳥居の方から白馬が現われ六所神社の境内の中をかけ回ったそう。

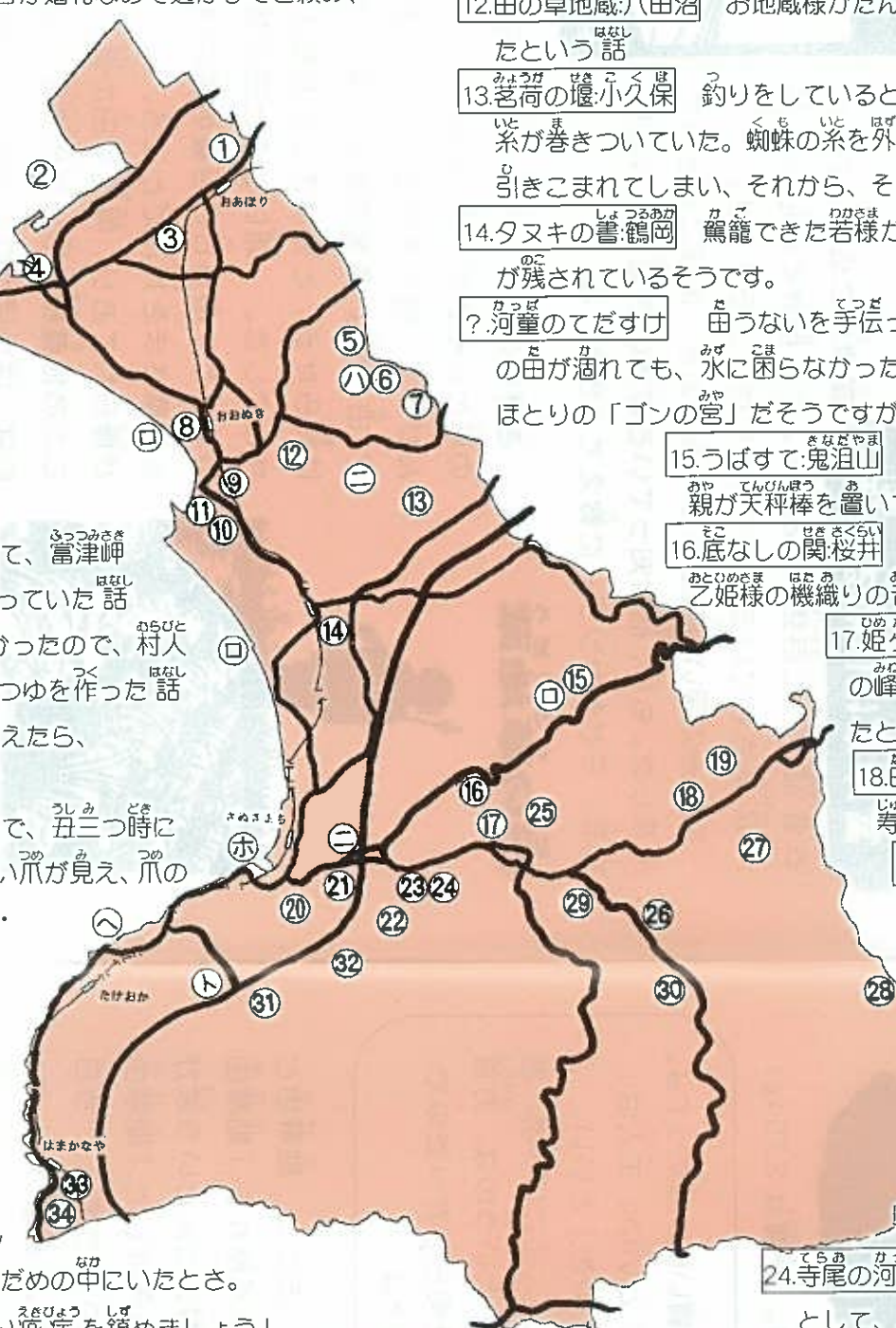
24. 寺尾の河童: 寺尾 河童がいたずらをしない約束として、馬方に渡した石の棒の証文の話

25. 黄金仏: 寺尾 寺のお坊さんが黄金の仏様を盗み、姫路で死んだ時、別人のように起きあがり「吾は、上総国天羽郡葦上寺尾の千手観音である…吾を送り還せよ。」と言った話

26. 関の姥さま: 関 背丈が鹿野山の2倍もある大きな姥が、懐から石臼を落とすとさ。

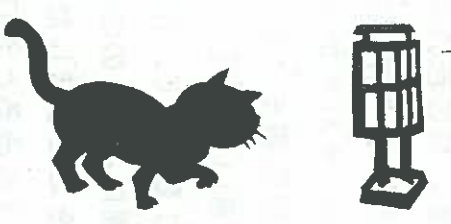
27. てっぼうぶちの話: 宇藤原 てっぼうぶちにいったいさまが、沢に落ちたけど、両手に山芋、てっぼうにはうなぎ、ふんどしの中に川んえびがへえってて得したって話

28. 高岩の水借り: 高岩山 山頂に源頼朝が使ったという釜があり、日照りが続く釜の水を竹筒に少し借りてきて、田んぼにまくと雨が降るので、今度は田んぼの水を竹筒一杯に入れて、お釜に返します。



## 地名の由来

イ: 富津・布引海岸: 日本武尊の妻の弟橘媛の櫛や布が流れついたので、「布流津」→「富津」  
 □: 染川・千種・鬼泊山: 日本武尊と阿久留王の戦いで、血が流れ、血染川(染川)となり、血ぐさの浜(千種の浜)阿久留王が涙を流したことから、鬼泊山  
 ハ: 三舟山: 日本武尊の乗っていた御船の着いた所だとか…  
 ニ: 数馬・百坂: 源頼朝が上総湊まで来たときに馬を数え「数馬」、吉野あたりで人を数えたので「百坂」  
 ホ: 十宮[竹岡]: 日本武尊に従った十人の宮さまが上陸した場所  
 ヘ: 津浜[竹岡]: 海岸に流れ着いた船に身ごもった立派な女の子の人が倒れていて、やがて男の子を生みましたが、母子とも病で死んでしまいました。この船の着いた所を、「津浜」と呼んでいます。  
 ト: 百首: 戦国時代に、城の殿様が「百首の歌を詠んで示せば、城を明け渡す」といった説と、攻めてきた軍勢の大將に、「家来の首を百とって差し出せ。」と言われ、城の殿様が、家来の首の代わりに和歌を百首つくったという話があります。



協力: 吉田兆男 切り絵: 平野みどり  
 参考図書:  
 「富津市の民話と民謡」中嶋清一編著  
 「房総の民俗」中嶋清一著  
 「房総の笑いばなし」中嶋清一編著  
 「房総の民話」編者高橋在久  
 「房総の不思議な話、珍しい話」  
 大衆文学研究会千葉支部編著  
 「ふるさと千葉県の民話」安藤操著  
 「富津町口承伝承」  
 「先人の心に触れて」: 天神山小学校PTA編集  
 「西かざさ昔むかし」(社)かざさ青年会議所